

婦人学

肆拾壹卷

肆四號

フレールベル會

第拾壹卷第四號目次

○外へ外へ

○社會と兒童

○父兄の注意すべき教育上の要件

○家庭叢話

△母親の子供に侮られぬ工夫が大事
△食事の訓練

○新入園児の取扱方(二)

(一)(二)(三)(四)

○保育の實際

△文字を書く幼児

△自由保育

○保育資料

△新遊戯法

△途上たより

○はぐりみ

○お父さんの成功

○子供すきの博士

倉	飯	鈴	藤	後	佐	橋	岸	光	和	小
橋	沼	木	田	藤	藤	本	邊	藤	田	林
生	靜	マ	東	り	滿	は	福	ふ	實	照
		サ	洋	ん	壽	な	雄	で		朗

フレイベル會規則

- 第一條 本會ハ幼児保育ノ改良發達ヲ圖ルヲ以テ目的トス
- 第二條 本會ハフレイベル會ト稱シ東京ニ置ク
- 第三條 會員タルラントスルモノハ幼稚園ニ關係アルモノ又ハ幼児保育ニ志ナルモノニシテ會員ノ紹介ヲ經ベシ
- 第四條 會員ハ本會ノ經費トシテ一ヶ月金拾錢ヲ贈出スベシ
- 第五條 令聞名望アル人ニシテ本會ノ事業ニ裨益アリト認ムルモノハ特ニ請ヒテ會員トナスコトアルベシ
- 第六條 本會ノ目的ヲ達セシムルガ爲ニ左ノ事業ヲ行フ
 - 一 總會 毎年四月廿一日之ヲ開キ保育ニ關スル演說、談話、保育參考品幼兒成績物展覽 會務ノ報告 幹事ノ選舉等ナラス
 - 一 但シ會日ハ會長ノ意見ニヨリ之ヲ變更スルコトアルベシ
 - 一 常會 毎年二月、六月、十月、十二月ノ第一土曜日之ヲ開キ
 - 一 保育ニ關スル演說、談話、協議、實驗等ナラス
 - 一 組合會 會員中特ニ或ル事項ヲ研究セントスルモノヲ以テ組織ス
 - 一 但シ別ニ組合規約ヲ定メテ會長ノ承認ヲ經ルモノトス
 - 一 雜誌發行 毎月一回雜誌ヲ刊行シテ之ヲ會員ニ配布ス
 - 一 前項ノ外本會ノ目的ニ裨益アリト認メタル事件
- 第七條 本會ニ左ノ役員ヲ置ク
 - 一 會長 一人 會務ヲ總理ス
 - 一 副會長 一人 會長ヲ補佐シテ會務ヲ掌理ス
 - 一 幹事 若干人 會長ノ指揮ヲ受ケ會務ヲ分掌ス
 - 一 評議員 若干人 重要ナル事件ニ關シ會長ノ諮詢ニ應ズ
 - 一 會長ハ客員中ヨリ推薦スルモノトス
 - 一 第九條 主幹、幹事、評議員ハ會長ノ特選トス
 - 一 第十條 本會ハ必要ニ應シ特ニ委員ヲ設ケ又ハ書記ヲ雇入ルルコトアルベシ
 - 一 第十一條 此規則ハ會員三分ノ二以上ノ同意ヲ得ルニアラサレハ變更スルコトヲ得ス

購讀の申込

（東京口廣一七二六六番）

- 本誌を購讀なされたき方は會費一ヶ月金十錢の割合で一ヶ年分なま
- とめて振替貯金へ御携込下されば直に購讀を發致致します。
- ◎一册郵税共金拾一錢
- ◎六册前金郵税共六拾錢
- ◎拾二册同金壹圓貳拾錢
- ◎郵券代用一割増

會 告

來る廿二日(土曜日)午後一時三十分東京女子
高等師範學校附屬幼稚園に於て別項の順序
に因り本會第拾六回總會相開き候間御繰合
せ御出席相成度候也

明治四十四年四月

フ
レ
ー
ベ
ル
會

フレーベル會第拾六回總會開會順序

四月廿二日午後一時三十分開會

一 唱歌(君が代)

二 會長の挨拶

三 會務報告

四 演說

一 招かれし家庭のいろく(英米新婦朝談)

河合道子氏

一 兒童の自我觀念

文學博士 元良勇次 耶氏

五 保育上の唱歌及遊戲

六 唱歌(保姆合唱の歌)

七 茶菓、懇談、陳列品の參觀

閉會

右參考展覽に供する物品は御心付に任せ何卒多數御提出被成下
度返送費は本會に於て負擔致す可く候に付此段御願申上候也



婦人小説

第十一卷第四號

外へ外へ

○春風が誘ひに来る。蝶々が迎ひに来る。若草は褥を布いて、花は美しき笑みをたへて、野も山も子どもとの外遊を待ち設けて居る。花の香草の香をとり添へた、かぐはしく新しい野の空氣と、萬人の浴するに任せて、與へて惜まないう豊かなる日光と、皆之れ子どもとの爲に備へられた、大なる自然の恩恵ではないか。何者の無情漢ぞ、此の好季に於て尙ほ子どもとの足に足枷せする。せめて此の好季にあたつて、その狭くるしい煉瓦塀の圍もと、究屈な保育室の机腰掛から、つとめて子どもを解放せざる。何も屋根の下のみが保育の場所ではあるまい。その手をひいて丘へ上り、その裾をかくげて小川を渡り、野を馳せ廻りて花を摘み、磯をつたふて貝を拾ふ間に、そこに大きな保育の場所があるのではないか。

○廣い自由な遊び場と、新鮮な空氣と、充分な日光とを、子どもとの身體の立場

のみから讚美するのは未だ足りない。吾人は寧ろ子ども精神の眞の發達の爲に、第一缺くべからざるものとして此の三つを要求する。わけても快活にして、清潔にして、温雅なる子どもの性情の發達の爲に、何よりも無くてならぬものは此の三寶である。しかも都會の文明は、だん／＼に此の三寶を子どもから奪つて、都會幼兒の此點に於ける不幸は、日一日と其の度を加へてゆくのである。眞に子どもの幸福を願ふものは、先づ此の不幸から我等の小さき友を救ふてやらなければならぬ。我等の幼稚園に於ける四時不斷の急務の一つも亦、常に此の點に存する。少くもその適切なる機會を捉ふることに於ては我等は決してウツカリして居てはならぬ。況して氣無精、足無精であつてはならぬ。

○幼兒をして充分に自然に接せしめよとは、フレーム先生以來、子どもの侶の最も大切な標語の一つである。而して吾人は、之れと全く同じ意味の

事(こと)を少く言葉(ことば)を換へて再び警告(けいこ)し度(た)い。他(ほか)でもない。『子供(こども)をして充分(じゅうぶん)に四季(しき)を識(し)らしめよ、四季(しき)を樂(たの)ましめよ』といふ事(こと)である。季節(せいき)々々(せきせき)に合(あ)はした保育(ほいく)資料(しりょう)の撰(せん)擇(たく)は言(こと)はずもがな、春(はる)は春(はる)、秋(あき)は秋(あき)らしい『季(き)の享(きやう)樂(らく)』をもつと多く(おほく)子供(こども)に與(あ)へ度(た)いと思(おも)ふのである。之(これ)は何(なに)も詩人(しじん)がつた事(こと)をいふのではない。『季(き)の享(きやう)樂(らく)』といふ事(こと)は、少(すく)くも人(ひと)の心(こころ)を四時(しじ)に新(あらた)ならしむるに於(お)いて、最(もと)も効(きか)ひの多(おほ)いものである。而(しか)して其(その)素地(そち)を幼兒(えいねい)に於(お)いて養(やしな)ふの必要(ひつた)うがあると思(おも)ふのである。保(ほ)育(いく)年(ねん)限(げん)三(さん)年(ねん)として、一(いつ)つの季(き)節(せつ)を眞(まこと)に識(し)らしめ、眞(まこと)に樂(たの)ますべき機(き)會(かい)は、僅(わずか)に三(さん)度(た)である。一(いつ)度の春(はる)と雖(いえど)、春(はる)の一日(いちにち)と雖(いえど)、決(きつ)してゆるがせにしてはならぬ。況(いはん)や雨(あめ)が有(あ)り風(かぜ)が有(あ)る。憂(うれ)する子供(こども)を眞(まこと)に心配(しんぱい)なく外(そと)へ連(つ)れ出(だ)し得(え)る日(ひ)は、一(いつ)春(はる)幾(いく)度(た)とあるものでない。其(その)か(か)げがへのない機(き)會(かい)を捉(とら)ふるに於(お)いて、保(ほ)育(いく)豫(よ)定(てい)案(あん)の如(ごと)き少(すく)し位(ゐ)り如何(いか)してもよいと思(おも)ふ。幼(よ)兒(に)保(ほ)育(いく)はそんな究(きう)屈(くつ)な答(こた)えのものではない。(倉(くら)橋(はし)三(さん))

社會と兒童

(フレイベル會二月例會に於ける講演)

文學士 小林 照 朗

唯今中川會長から御紹介に與りました小林であります。私は此會で御話をする程の充分なる資格のあるといふ事を自信して居りませぬので、先般も黒田先生から何か話せよといふ事でありましたが、其際同先生からは社會學上に於ける兒童といふやうな題で話して呉れぬかといふことでありましたが、殆んどさういふ問題はまだ考へて見た事もありませぬ、何れ又調べる機會がありましたらといふ位で居つたのでありますが、丁度今回は是非何か話しろといふことを同先生から學校で要請せられましたので、先づ承諾して置きました次第でございます、ところが、其後倉橋君から題を掲げたいから是非題を呉れといふことでありまして、曾ての申出もありましたものですから、兎に

角「社會と兒童」とか「社會と子供」とかいふやうな事で、責を塞がうと申上げて居つたやうな次第であります。就きましては別に前以て腹案があつて、言はねば腹ふくる、といふわけで題を決めたのではなくして、題さへ決めて置けば何か話する事が考へられるだらうといふやうな事から、斯ういふ題を付けた次第でありますから、其事を前以て御断りして置きたいと思ひます。就きましてはチコット此題に因んで何か御話をしやうと思つて茲に二三かきつけて來たことがございます、それを御話しやうと思ひます。もう一つ御断りして置きたいのは、私は曾て兒童教育に従事したことはないのではありません、どんなに若い年齢の人と申しまして、私の経験では二十歳以下の少年或は青年に教へた経験はありませぬので、大學を出るより私立大學などで教師はやつて居りましたが、大抵は二十五前後の人でありまして、此の二三年來、女子高等師範に奉職致しましてから多少は間

接(つ)に子供(こども)に接(つ)する機(き)會(かい)もありませんと云(い)つたやうな次第(しだい)で、其(その)點(てん)から云(い)ひますれば兒(こ)童(どう)といふことに就(つ)ては餘(あま)り深(ふか)い教(け)育(いく)上(じやう)の經(けい)驗(げん)があるのではありませぬ、それに今日(こんにち)私(わたし)の語(かた)らない話(はなし)でも聽(き)いてやらうとせらるゝ聽(き)衆(しゆ)諸(しよ)君(くん)の方(かた)々は却(か)つて、私(わたし)より深(ふか)い經(けい)驗(げん)を斯(か)ういふ方面(はうめん)には御(ご)持(も)ちの方(かた)でありまして、殊(こと)に本(ほん)會(かい)の性(せい)質(しつ)上(じやう)度(た)々々(たがたが)この方面(はうめん)のことは御(ご)研(けん)究(きゆう)になつて居(ゐ)ることと思(おも)ひます。此(この)上(じやう)私(わたし)が語(かた)らぬ御(ご)話(はなし)をする必要(ひつやう)はなからうと考(かんが)へます。

從(したが)つて今日(こんにち)は、社(しゃ)會(かい)と兒(こ)童(どう)と題(だい)しましても教(け)育(いく)上(じやう)の事(こと)又は心(しん)理(り)上(じやう)の問(もん)題(だい)といふやうなことは、もう今(いま)までに充(じゆう)分(ぶん)御(ご)聽(き)きになつて居(ゐ)られるだらうと思(おも)いますので、聊(いさ)か異(い)つた方面(はうめん)に就(つ)て御(ご)話(はなし)して見(み)やうと思(おも)ふて居(ゐ)ります。或(ある)は題(だい)意(い)から申(まう)しますれば、社(しゃ)會(かい)と兒(こ)童(どう)といふやうな事(こと)である以上(いじやう)は、一(いっ)體(たい)社(しゃ)會(かい)とはどんなものである。子(こ)供(ども)とはどんなものであるといふやうな事(こと)も御(ご)説(せつ)明(めい)すべきやうと思(おも)はれますが、今日(こんにち)はさう云(い)ふやうな抽(ちゆう)象(じやう)的(てき)の問(もん)題(だい)は扱(あつか)ひ

きに致(いた)しまして、單(ただ)に單(ひま)近(ぢか)なる語(かた)らない話(はなし)をして見(み)やうと思(おも)ふのであります。

社(しゃ)會(かい)と兒(こ)童(どう)といふ事(こと)は最(ちよ)も密(みつ)接(けつ)の關(かん)係(けい)を有(あ)ちまして、今日(こんにち)起(お)りつゝある問(もん)題(だい)は、兒(こ)童(どう)といふものは社(しゃ)會(かい)に如(ごと)か何(なに)なる地(ち)位(い)を占(し)むるかといふことでありま(ま)す。即(すな)ち社(しゃ)會(かい)問(もん)題(だい)の點(てん)から考(かんが)へて、子(こ)供(ども)といふものが一(いっ)つの重(おも)きを爲(な)すといふことでもあります。

これは最(ちよ)も早(はや)申(まを)すまでもなく社(しゃ)會(かい)問(もん)題(だい)として、兒(こ)童(どう)問(もん)題(だい)なるものは其(その)重(おも)要(やう)なる一(いっ)つであるといふ事は、茲(こゝ)に喋(しゃ)々(しゃ)するを要(え)せぬだらうと思(おも)います。彼(か)の有(あ)名(な)なるエレンケー氏(し)は、「二十(にじゅう)世紀(せいき)は兒(こ)童(どう)の世(よ)紀(き)」であるといふ事(こと)を云(い)つて居(ゐ)るのであります、今(いま)まで兒(こ)童(どう)問(もん)題(だい)といふ事(こと)は、非(ひ)常(じょう)に閑(かん)却(かく)されて居(ゐ)つた。この兒(こ)童(どう)問(もん)題(だい)こそ、此(この)世(よ)紀(き)に於(お)いて解(かい)決(けつ)すべき問(もん)題(だい)であるといふのであります、斯(か)やうに論(ろん)じて居(ゐ)る位(くらい)でありまして、從(したが)つて兒(こ)童(どう)研(けん)究(きゆう)といふことは、單(ただ)に心(しん)理(り)學(がく)の問(もん)題(だい)としてい(い)はなく社(しゃ)會(かい)上(じやう)の問(もん)題(だい)として重(おも)要(やう)なる問(もん)題(だい)であらうと思(おも)ひます。の

みならず此社會問題としての兒童問題といふことは當然茲に惹起して來る他の大問題があるのであります。それは何かと申しますと婦人問題であります、兒童問題といふことを完全に解決しやうといふには爰に婦人問題を解決しなければならぬ。即ち婦人の研究といふことは、どうしてもこれと關係して來るのでございます。さういふやうな事を申しますと、所謂兒童問題なるものは非常に重大なる問題となるのでありまして、先づ私が今日社會問題として兒童問題は、一體どういふやうな問題を我々に提供するかを考へて見ますならば、チヨット拾い集めて五六考へることが出来るのであります。これは兒童問題の中でも殊に注意すべき兒童問題であらうと思ふのであります。即ち此社會に於て、段々生存競争が劇しくなると共に社會状態が變つて來る。従つて兒童の保護問題、或は彼の動物虐待防止問題といふこと、同じやうな名を付けて、兒童虐待防止問題といふやうなこ

とを唱へる人もある位でありまして、兒童問題殊に社會問題の中の兒童問題は實に重要な問題となつて來たのであります。目下日本で問題になつて居りまする、彼の工場法案であります。工場法案は要するに一部分兒童問題でありまして即ち兒童保護問題で、如何様な程度まで、工場の勞働に對して兒童を保護するかの問題が重要な中心になつて居るやうに私は思ひます。即ち此意味に於ても兒童問題は社會問題の重要な問題の一つであるといふことが出来るのであります。第二に兒童問題の中には婦人問題といふことを考へられると思ふのであります。何故と云へば申すまでもなく、子供と云ふものはどうしても女から生れるもので男が生む譯に參りませぬ。従つて子供の問題は子供を生むもの問題になる、爰に婦人問題といふものが重要な意義を有つて來るのであります。婦人問題の解決如何によつては子供を生む生まぬの問題が起つて來る

のでありまして、どうしても婦人問題は兒童問題と離れる事の出来ないことになるのであります。既に婦人が子供を生むものであれば、續いて來るべき兒童問題は産兒問題といふことになるのであります。即ち子供を生む其數或は生む時の色々な方面の事、さう云ふものを含んで來て爰に産兒問題といふことが儘かに兒童問題の一を占めて來るのであります。これは近來歐羅巴あたりではやがましい問題になつて居るのでありまして、一軒の家に子供が幾人あつたら宜いか、或は子供は無くつても宜いかといふやうな問題であります。これに附屬しては、其子供は女子を生む方が宜いか、或は男子を生む方が宜いか、男子でも女子でもそれを人為的に生むことが出来るかどうか、若し出來るとしたらどうである、といふやうなことが總べて含まれて居ります。これに産兒問題の名を付けたのでありますが、此産兒問題といふことも儘かに兒童問題の一といふことが出来るのであります。

す。而して又社會問題の一つであらうと思ふのであります。近來佛蘭西では二兒制度といふ名が付いて居ります。一婦人の子供を生む數は二人で澤山である。即ち一人は家を相続すべき者もう一人はその豫備として必要である。併ながら三人以上になると經濟上の問題か或は餘り子供を餘計生むと女が憔悴れるからといふやうな方面の問題、或は折角子供を育て、も充分之に教育を施すことが出来ないとか、社會問題として重要な問題となつて、それに二兒制度といふ名が付いて居るのであります。が、これ等は矢張り産兒問題の中に論せらるべきものであらうと考へるのであります。次に兒童問題として別に論すべきものは家庭問題であらうと思ふのであります。即ち家庭とは如何なるものであるか、家庭は其一國の單位となるものであり又社會の單位となるものである、單位となるものは如何なる家庭であるか、斯ういふ事は

社會學上随分議論があるのであります。これは極めて研究すべき問題であります。今日此所には述べませぬが、詰り家庭といふものは、どうしても児童といふ事を研究する上に於ては研究しなければならぬ問題であらうと思ひます。或る學者の如きは、児童は家庭を離れて考へられないもの家庭から引抜くことの出来ないものであるといふやうに云つて居る人すらある位であります。殊に家庭問題は、今日の如く一般世界の趨勢によつて衰へて来る傾向がある際に當ては、日本の如き家族主義を以て國家存立の要素として居り、氏を尊び、族姓を尊ぶ國柄に於ては、どうしても此家庭問題、家族問題は重要な問題で、大に考究しなければならぬ問題であらうと思ふのであります。それから之に關聯致しまして、家族といふもの、色々な制度から、其建物或は設備といふやうな事が、社會問題になつて居るやうであります。それが果して良いか悪いか、良いとすればどうする

悪いとすれば如何なる救済方法を講ずる、斯んなことが問題になつて居るのであります。それから育児問題、子供を育てるといふやうなことも矢張り児童問題の中の一として重要な位置を占むべきものであらうと思ふ。即ち子供を育てるといふこと、これが今日は社會問題として有力になつたのであります。子供を乳母で育てないで即ち母の乳で子供を育てないといふ事をやかましく非難して居るやうであります。これ等も児童問題として、此育児問題といふことも這入るだらうと思ふ。勿論此外澤山ありませう、教育問題もありませんが、この問題は餘りに重大である爲に茲にいふ必要はあるまいと思ふのであります。尙ほ拾ひ集めて來れば澤山ございませうけれども、先づ私は教育問題の如き餘り明瞭なるものは避けまして、少くとも先づ、児童問題として社會問題として考ふるには、児童保護問題、婦人問題、産兒問題、家庭問題、及び育児問題といふやうな事に涉つて考へな

ければならぬと思ふのであります。

斯の如く兒童問題として論じても非常に範圍が廣くなつて充分論じ盡せぬと思はれる。これ等の問題の各々に就て一々御話でもすれば餘程綿密なるお話も出來やうと思ふのでありますが、先づ今日は、兒童問題として提供すべきものは斯の如きものであるといふことに止めて、之を唯だ今日のお話の序論として置きたいと思ふのであります。そこで、斯ういふやうな多少學究的な、又直接社會問題として有力なる重要問題は他日の事と致しまして、私は今日は題に出しました如く、極めて通俗的に「社會と兒童」といふやうなことに對して、單に自分の所感を陳述して見やうと思ふのであります、私の題を御覽下さいました時には、大抵の御方は斯う御認めになつたことゝ存じます。社會と子供といふやうな題が出て居りますから、之は兒童が社會から、どんな影響を受けるだらうと云ふ事を、私が愛に御話しでもする、即ち社會

の影響といふものは、随分兒童に及ぼすものであるから、御互に社會の一員たるべき者は兒童感化の上に注意しなければならぬ、彼のザルツマンの蟹の双紙といふ本には世の父兄の手本を示す上に大に注意しなければならぬといふ事を諷して居りますが、今日家庭に於きましては、随分親が自分の悪い風態を見せて置きながら、子供の教育とか子供の躰けとかとやかましくいふものがある。それでは駄目である。どうしても世の父兄たるものは自身先づ注意しなければならぬといふことを根本的に論じ、不良少年のことに就て、如何なる社會が、斯かる不良少年を作る上に影響を及ぼすかといふやうなことに就て論ずるであらうといふ期待を有たれることゝ想像するのであります、貴方がたが斯の如く想像されるといふ事は、即ち之が今日の問題となつて居ることを證據立てる、且つ又人々が多く論ずる所であるのであります。これは僅かに此社會と兒童といふやうな題について

は誰れでも想像すべき事柄であります。此想像されべき事柄は他日の機会に譲りまして、今日は他の方面の事を御話して見やうと思ふのであります。

それで今申しまするやうに、社会が兒童に與へる影響といふやうな事は今日申しませぬそれと反對に、社会が子供よりどんな影響を受けて居るかといふことに就て、御話して見やうと思ふのであります。子供といふものが社会に影響を及ぼす上に就て、詰り子供を主にしてそれが及ぼす影響に就て御話して見やうと思ふのであります。申すまでもなく子供自らは社会を形造るものでありますから、子供が社会に影響を及ぼすことは云ふまでもなく重要なものであるであります。此意味に於きましては、曩に申しました社会改良問題といふやうなことは、曩に申しました社会改良問題といふやうなことであります。兒童改良問題として注意しなければならぬのであります。完全に社会の改良をしやうと思へば、先づ兒童から行かなければい

けない、早くから手を着けなければツント年を取つて、立派な大人になつてからの癖は改良しやうとしても非常に困難であります。俗に「三つ兒の癖は百まで」と申しますが、子供の時に付いた癖はナカ／＼抜けないものであります。本統に社会を改良するには兒童の時からやらなければならぬ

い次第であります。近來世間が利口になつて来て、新聞なんかが讀者を殖やす手段として兒童に着目して来た。此間フイーランドといふ人が新聞事業の觀察に来て、日本の新聞記者に對して斯ういふ問題を話しました。それは西洋では近來新聞の讀者を殖やすといふ事の爲に、あらゆる手段を講ずるといふのであります。どうしたならば新讀者を得るかといふことに就て、非常なる競争をやる。其結果色々な投票が近來西洋でも流行する、普通投票ならば珍らしくないので近頃は牛の投票、驢馬の投票などをやる

それは日本でもやります。一時は美人投票が流行したが、近頃は進んで美男子の投票をやつて居る位である。如斯新聞投票をやつて居るのは全く新聞を賣りたいが爲である、今度はもう一步進んで、未來の新聞購讀者を牽付けやうと試みて居る。即ち今日の子供を他日自己の新聞の購讀者にしやうとする手段を講じて居る。それは何かといふと此頃少年雑誌の發行を新聞社でする少年雑誌を發行してそれに依つて儲けやうとするのではない、例へば時事新報なら時事時報で少年雑誌を發行する、あれは少年雑誌として儲けるのが目的でなくして、其少年雑誌を通じて、少年の頭に時事新報の名を結付けて置いて、さうして彼等が世に立つた時には、小さい時から頭に這入つて居る其新聞を購読するといふやうな見込で、少年雑誌を發行する傾向になつて居る。西洋の投票よりモット進んで居ると云つたら流石の西洋人も驚いたとか申すこととあります。兒童といふ事を研究する人から

見れば、新聞が斯の如き方面に着目することも注意すべき現象であらうと思ふ。

一體世の中の活動の原は子供である。お瓦が社會を見て居ると、それ程子供が社會活動の要素であるとは思へぬやうであります、芝居でも見ましたならば、非常にそれを感じさせる。スツクリ目前に現はして来る。例へばどんな芝居を見ましても、子供が出て來なければ芝居にならない。観劇者が喝采するとか、或は手を舉げるとか涙を流すとかいふ場所には子供が出て來ないといふ事はない。三味線や淨瑠璃で賑やかにやつて居るよりも、子供が出て來た方が遙かに人に感動を與へる。されば芝居を見ても如何に子供が社會活動の上に必要な地位を占めるかといふ事が分るのであります。私は歌舞伎座の一月興行のめ組の喧嘩を見たのであります。其時に辰五郎が命仕事の喧嘩に出る場所をやつて居りましたが、女房と分れる時の台詞など随分苦心もして居りましたらうが、

見て居る者に涙などの出るやうな所はない。殊に斯ういふ任侠を看板にする俠商賣でありますから自分の命は亡くしても男といふものを賣らねばならぬといふ事を説いて居る。あゝいふ所を見ると、如何に日本の武士道といふものの、氣性がシツカッして居るか分かる。或は此氣性が極端に行けば弊害もありませうけれども、今日の日本の状態と比較して見ると甚しい違ひであると我々をして思はしむるのであります。其際にも見て居る中尙ほそれ程の感動は與へませぬ。ところが、辰五郎が鷹口を肩にして出やうとする所に、十歳位の小さい男の子が、「父さまか」と云つて出て来て取り締る所がある、引放して出やうとしてもナカ／＼振り切れない、十歳位の子供が出て来て、初めて芝居の全體が活きて來るのであります。此所のところでありませぬ。即ちこれは外の事を意味するのではなく、今日社會と兒童といふことを考へる上に、子供が重要な部分を占めて居るといふこと

を證據立てるのであります。御互が家に於きましても或は社會に於きましても實に密接なる關係を有つのであります。それを最も簡單に現はすものは即ち芝居に於て我々はこれを見ることが出來ると思ふ。日本の通俗教育には與つて力があると思ふ。かの淨瑠璃義太夫でも大抵人の泣く所は、子供の出る場所に限つて居る。此所等は日本武士道の精神であらうと思ひます。(未完)

外へ外へ(二)

○いくら子どもを外へ連れ出しても、保育者自ら自然に對する高調な趣味を有するものでなくては、眞に自然の感化を子どもに與へることは出來ない。之れが保育法の原則だとか、お義理一遍の心から自然に接したとて、活きた自然との活きた接觸が何で出來よう。一輪の花一莖の草、子ども等は無心に觸んで居るのかも知れない。併し、その無心の中に眞の意味を見出すが保育者の任ではないか。スマンレーホール氏の言にいふ。「自然と一つなるは兒童の榮譽なり。兒童と一つなるは教師の榮譽なり」と。而して眞に此の境地に達する爲には教師が先づ自然と一つでなければならぬ。

父兄の注意す可き 教育上の要件

和田 實

教育と云ふ事は家庭と學校との協力に俟つ可きものであることは、今更云ふ迄もたゞいことですが。扱て然らば家庭に於ては如何なる點に注意したらば宜しいかと云ふことは一寸簡單に云ひ盡くし悪いこととあります。併し、由來學校と家庭とは其力を用ゆる點が異つて居りますから、従つて其注意す可き方面も各特長を持つて居るものであります。一口で申せば、學校では主として、子供の理解力を進歩させ、認識力を高めると云ふことで、教育して行かうと云ふので、詰まる所、智力を用ゐて教育して行かうと云ふのであります。併しながら、家庭に於ける教育的影響と云ふものは斯かる智識的のものではなくて、主として感情的に又習慣的

に之を慣らして行くことに於て教育的感化を與へるものであります。故に家庭に於ては別段倫理學を教ゆることなくとも、又家政學を教ゆることなくとも。人を自然に道德家たらしめ、家を齊ふる方法をも會得せしむるものであります。

家庭教育は斯様に何時の間にか、其効力を現はすものであります。併し、是も斯様に健全な効力ある様に家庭の主宰者たる人が注意するからのことで、若し家庭を取り縮る可き人が、何等の注意をもすることなく、全く放任して置いたのでは斯かる良効のあらう筈のものではありません。然らば家庭に於ては概して如何なる件々に注意す可きか、即ち子供は家庭に於て如何に不知不識の間に移行行く可きか、簡單には述べ盡くし難きことではあります。今其主なる三四の點に就いて説明を試みやうと思ひます。

(一) 子供の遊戯

教へずして教育するには子供をよく遊ばせる都合

よく遊ばせることが大切であります、よく遊ばせると云ふことは只子供自身の遊びに放任せずして、いかに教育すべきかと云ふ目的に向つて有益なる遊戯をとり遊びの目的が利益ある遊びで教育の目的に行くことが出来る様な遊びをさせると云ふことが大切であります。

遊ぶと云へば普通には無益のこの様に考へて只時間を無益に使ふのが遊ぶことの權になつて居るのは通弊であります。之れは遊戯と云ふことを悪く解釋したのであります。而し子供にとりては遊び程利益あるものはありません、子供が遊戯をするのは教育上大切なことで子供と云ふものは遊ぶので教育が出来るのであります。

未だ學校に來らざる子供でも遊ぶから大きくなるので遊ぶことがなかつたならば子供は大きくなることができません。されど子供が遊ぶには玩具がなかつたならば子供は遊ぶことはできません遊ぶことができなければ子供は死んでしまふのであり

ます。特に兒童が遊ばなかつたならば活動と云ふことがなくなつてしまふので人は活動で生きて居るのであると云ふことは兒童に尤も適切にあてはまるものであります、蓋し遊ぶと云ふことは子供は活動であります、であるから活動することがなかつたならば兒童は死より外にないのでありますして見れば遊ぶと云ふことは子供にとりては甚だ大切であると云ふことが明白であらうと思ふ。世人のすること色々分類してかゝることをする人、かゝることをする人と分類して見ると同じく子供の遊戯も同じであります、大人は小説を好み子供はお伽噺を好み、之と同じく大人が玉つきなり Foot ball なり野球をすれば子供も之と同じくことを好み、大人が碁を打つには大層頭をつかふが子供も又頭を使ふて遊ぶことをします、子供の遊戯が全く發達して大人の遊戯となるに外ならないのであります、之は大家も同じ意見を述べてをります、實際子供の遊戯の發達したものが大

人の活動となるので遊戯は人の活動の凡てを含むものであります。

子供を遊ばせるのは子供が將來世に立ちて活動するに都合よからしむる爲めであるから子供を教育の目的に叶ふたる様に遊ばせることが大切であります、かくすることが経験上より見ると正當のことであります、而して家にありて子供を遊ばせるには其遊戯の種類に注意せなければなりません、此に注意を向けてをれば必ず子供があるものに進み又ある方面に發達しつゝあると云ふことが分るのであります、而せずして子供をばかくせんと思ひしにかゝる子供になりたなど、云ふのは子供の遊戯を知らないからであります、子供が或る方面に導かれつゝあることを知らないからであります、いかなる感化を受けいかなる行動をなしつゝあるか、気がつかないからであります、父兄たるものが時によりてかゝることを強ひたる覺えがないのか、かゝる子供になつたとて嘆くのは其人は教育の

方法に三つあると云ふことを知らないからであります、若し此方法を皆よく知つて居たならば、今子供はいかなる方面に進みつゝあるかと云ふことを知り又其向ひつゝある感情を注意して適當に之を導くことができず。

特に遊戯を見たらば其事がよく分るのであります、遊戯はよく其方法を考へてやらなければなりません、子供はいくらしてもかくすことができませぬので猫をかぶることは子供にはできないのであります、遊戯を見ては兒童の善惡を見ることが容易く分ります、故に遊戯を善き方法の方に導くことが大切であります、之が遊戯に就いて第一に注意しなければならぬことでもあります、次には遊戯の種類は善であつても子供にとりて興味がなければ無用であります、興味がなかつたならば少しは遊んで子供はすぐに遊ぶことを止めますそこで教育的價值ある遊戯をさせるには興味をもたせると云ふことが大切であります、少し注意したならば此數

育的方面に向ふる遊戯に興味をもたせることができません。次に遊戯をさせるには子供の自由活動に任かすと云ふことが大切であります。人から干渉され人からこうやれあゝやれと云はれる様になる遊戯のでなくして仕事をするようになるのであります。遊戯は仕事ではありません、何處迄も子供の自由を重んじて遣らねばなりません。且遊戯は子供の自身の活動の充分なるを要するので人から手をあげよと云はれるから手をあげるでなく自分でやるでなければなりません、又目的に適ひません、自分でしたことではなければ能力は發達しません。次には玩具に注意することです。

子供を遊ばせるには玩具が大切であります適當なる善良なる玩具を興へると云ふことが肝要であります、別に高價のものには及びません、最も必要と思ふものを興ふることが大事であります、土産物などに高價なるものを求めて來る要はありません

子供自からの求むる所の玩具が大に効能あるものであります、遊戯の種類をよく考へて之に適したるよき玩具を興ふると云ふことが必要と思ふます

一方に教育の目的を立てながら之に背ひいた遊戯をさせ玩具を興へては却て反對の方面に導くこととなりますからよく注意しなければなりません。

(二) 子供の讀みもの

子供でも有益なるものを讀むことによりて父兄の氣がつかない思想を持つて居ることがあります殊にませた子には特にかゝる弊害があります。

お伽噺も中々少年の讀み者として大に教育上利益があること云ふ點から少年の讀み者を豊かに興ふると云ふことになりましたから父兄たちの知らざる方面に子供の智識が發達して居るのであります、而し子供に多くの讀み者を興ふると云ふことは有害であります、なせかと云ふと現在讀み者と云ふと子供の想像力を興奮さす上に大なる力を持つて居るもので子供の趣味に適してをりますすが之は或

る程度までは、教育上大切でありますが想像力の
 發達し過ぎると云ふことは却て危険であります。
 之は別に理由を申さなくとも御分りのことと思ひ
 ます。

大きな青年でも小説に耽けるが爲めに大なる弊害
 を生じたと云ふ様なことは明白なることでありま
 す之と方面は異なつて居りますが同じく想像力よ
 り來る弊害は同一であります、故に讀物も亦之を
 制限すると云ふことが大切であります、次には

(三) 子供の家庭に於ける日常生活

之は知らず知らずの間に子供を變らせるもので周
 圍の空氣、社會、氣候等を適當に曬梅せざれば子
 供を感化することはできません、家にある子供の
 日常生活は其凡てを教育的ならしむることが大
 切であります、而して家には夫々仕事あり特色が
 ありますから教育上より見てどの家庭をも最上の
 教育的家庭とすることはできません、而し兩親た
 るものは子供のためにはあるものを犠牲とする

ことも大切でありませう。

子供のためならば酒や煙草とか云ふものを犠牲に
 して止ると云ふ其合に、ある點まではあるものを
 ぎせいにして以て己れの家を教育的にすると云ふ
 とは容易のことでありませう、之は充分にはできな
 いこともありませうが又いかなる家でもできるとは
 申されませんが或る程度迄としか申されないの
 あります、が家庭に於ける日常生活が子供の精神
 を支配することは大なることでありますから出來
 るだけ注意しなければなりません。

特に子供が兩親に對する感情といふものは家庭の
 生活の狀況より來るのであります、日本の國體が
 三千年の歴史ありて初めて大和魂を生ずるのと同
 じく家庭の生活が孝行なる子供を作り出すのであ
 ります。子供と兩親との關係よりできるので、之は
 學校が孝を教へたからにもあらずして心から知ら
 ず知らずの間に來るべきものであります、孝行を
 せよと云はずとも子供の心にできると云ふことが大

切であります、子供はなきけ深き母の感情を忘れないのであります、此母に對する子供の感情が家をなす元となるのであります、子供が夜中目を醒せば母はねむき目をもあけて子供に乳をのませる子供は其母の乳を持つてねる、之が母に對する感情となりて親密となるのであります、子供が此感情を作らざれば母と子供との關係は冷やかなものであります、かくては父に對する感情は尙更冷淡となるのであります、蓋し父は子供に對しては間接でありますから子供と母とが結び付かざれば子供と父とはむろん結び付かんののであります、子供が母にたよると云ふこの心が大層大切でありますかくて両親と子供とが強く結びつくのであつて子供が大きくなつて家に歸りても父の顔は見えなくとも淋しく感じないけれども母の顔が見えなければなんとなく淋しく感じて其母をさがします人にも其母の在所をき、又自身で家中をまはりたくなるので此感情は子供の時の母の慈愛から來るので

若し母にして慈愛心といふものがなかつたならば此事はありません、此感情あるがために母と子供とが結びつき又父と結びついて初めて家庭を形作る事ができるのであります、家庭に於ける日常生活に注意してある意味深きものとするには父兄たるものは子供に對してよく考へをめぐらさなければなりません、而し之がために殊に政治的手段などを用ふる要はありませんが子供に己れの感情をうつし得る様に支配して行くと云ふ精神を持つて居ることが大切であります、次ぎに

(四) 子供の外出

家にありて己れが注意しつゝある人を知らず知らず悪しき子供とするのは種々の理由がありますけれども外出を注意せざる事が原因となることが多いのであります

外出と云ふことは種々の事を子供に教へるもので子供が或は見世物を見に行くとか散歩にでるとか遠足に行くとか旅行にでかけると云ふことは教

育上大なる影響感化を及ぼすことが多いのであります、之は知らず知らずの間に子供をある方面に導くからであります、観覧物を見たゝめに子供がある方面に導かれたるなどと云ふのは多くあることで、例へば浅草や上野に行つてきたためにある方面に子供を向はせたとか又ある富家の子がある勸工場である盗みぐせある子が繪草紙屋の本を盗み取るのを見たため己れもそれをまねしたくなりて遂己れが其を實行したなどと云ふとがあります、かくのごとく外出した時に子供が見たりしたとか又世人のしたことを見ては頭に入れて置いて其ことをまねして後には家庭のしつけに反對した方面に走りて父兄と云へども之をいかんともすることはできない様なことになるのでありますから特に外出と云ふことには注意せなければなりません。

それが爲めには外出から歸つた時には子供には何か變化なきや否やに注意し又今日の外出遠足に

はいかなる獲物を得て歸つたかを常に注意しなければなりません、子供の變化と云ふことに氣をつけて己れの目的に反したる點はなきや若し反したる點ありと認めたる時は直に之を打破することに盡力せなければなりません。

かくて常に兒童の外出、遊び、玩具、讀物に氣をつけて居られたならば子供を横道に導く様なこととはなと思ひます、それから子供と云ふものは大きな子供と小さな子供に於て其發達階段に差違あることに注意しなければなりません、幼稚園の子供と小學校の兒童とはいかなる點か違ふかと注意して之に適したる教育を施すことが肝要であります、是は大體兒童研究の任務であります、今日まで充分に研究が出来ては居りません、御同僚兒童の教育に従事して居るものは今後努めて此方面の研究を進めて明瞭な區別を立て大に家庭教育に費する必要があります。

終りにもう少し御話したかと思ふことは

(五) 金銭のこととであります

子供の教育の爲めに父兄たるものが金銭を要すると云ふ事は子供自身も之を知つてをるのであります。此金銭を儉約すると云ふことを教ふるが教育上甚だ大切なことであると思ひます。子供の教育に使用する金銭は其直接に使用するものであつたらば身分相當より儉約する方がよいと思ひます。間接に使用したる金銭であつたらばなる可く多きをよしとします。けれども直接に使用したる金銭が多いと云ふことは有害無益であります。子供を教育するたに顧問を置くとか又之がために圖書館を作るとか間接のためならば多額の費を投するも決して非でありません。而し直接に使用する錢例へば帽子を買ふとか鉛筆を買ふとか之等の費はなる可く儉約するのが宜しいので他の方面から云へば悪い鉛筆、悪き紙を持たせるとか云ふでなく之は程度問題で或る程度以上のものを用ひしむる用がないと云ふのであります。圖書をかくには此位の

鉛筆ならばかけると云ふものであつたらそれで足るので其以上に贅澤なものを持たしむるのは宜しくないと思ふのであります。

かゝる無用の物に金銭を出しては子供に浪費と云ふことを教へるのであります。金銭の價値を安からしめるのであります。従つてかゝる子供は世間の普通の物價を高く見積ると云ふことになるのです。即ち子供の日常生活の度合が上流のものだと云ふことを示すことゝなります。

大名をそだてるならば之で差支はありますまいがさなくとも常識を養成する教育にありては大なる間違であります。凡て物價には程度があります。此度以外に價値を思はせると云ふことは甚だよろしくありません。

筆に何十錢、紙に何十錢かゝるなどと云ふことを思はせるのは甚だ有害であります。初めから有爲の人とならしむると云ふのが、家庭の目的でなく大名を作り上品の人を作ると云ふのが家庭の目的

であるならば浪費と云ふことも差支ありますまい
 が有爲の人物を作り常識ある人物活動する人間を
 作りたいのが目的であるならば品物の眞價を知ら
 しむるでなければなりません程度以外の物價を思
 はせてはなりません儉約とは此點であります、尤
 も物價と云ふものは世の進むにつれて高くなるの
 で明治以前と今とは大差があります、物價より金
 錢の價値が安くなると云ふことはあります唯子
 供に任かして置いて世の進みより子供の考へを早
 からしむることはよくないのであります、なる可
 く子供の考へを變化させないのが子供のため、社
 會のためにもよいと思ひます、吾人は子供の將來
 を考へることが大切であります。かくて此世を不
 仕合にする所の原因となるものを除いてなるべく
 世の中を仕合せなものと思ひたいと思ひます、社會
 黨が出づるに至つたのも、金錢の價値が下がつた
 のが原因かも知れんので危険千萬のことでありま
 す、子供に金錢の眞價を知らしむると云ふことは

急務と思ひます生計の貧乏家には一錢の錢も價あ
 りてかゝる家にはかゝることを云ふ必要もありま
 せんが少し豊なる家の子供にありては或は十錢、
 五十錢の錢は少しも價なきものと見る様な子供が
 できるとがありますから注意せねばなりません。
 要するに教育問題は家庭と學校とが一致すべきで
 あります、學校には學校の目的あり、家庭には家
 庭の目的がありますから學校には學校に於て實行
 し易き所あり又家庭には家庭に實行し易き所あり
 て各其長所を有して居りますから其長所を捕へて
 之を實行して互に助け合はなければ教育が充分に
 出來ないのであります。

外へ外へ (三)

○子どもの自己活動の最も正當な又最適當な資料として自然
 の如くいものは無い。理屈なく教へ、教へずして活動せし
 むるもの、自然に如くものは無い。假りに草原に子どもを放
 つて、その自由に遊ぶまゝを見よ。きまりきつた種木や折紙
 の練習と違つて、如何に存分に、如何に端しく、子ども等の
 自己活動が擡にさるゝかに驚やである。
 世に子どもに最も適當な玩具として、自然玩具の如く適當な
 ものではない。天の興へた自然を、天の興へた自己活動によつ
 て樂むのが、自然玩具の第一である。

家庭叢話 (承前)

光 藤 ふ で

○母親の子供に侮られぬ

工夫が大事

一體子供といふものは、新しい世界に生れ出で、その受ける教育も自然新しいのであります、子供が學校で習得する事、幼稚園の仕事皆今日新しい方を取つて居りますが、母親の方はと見ますれば、若い母様は兎も角少し年寄りし母様は、十年一昔といふ其の昔時に受けた教育が、思想の根となつて居ります、そこで親の方からは子供の習ふ事其の他すべてが目新しい見えます、子供の方からは母様は時代の變遷で今日我々のする事には餘り明くないのであるのが一から十まで偉い方だとは見えません、只限りなき慈愛深き母親は慕ふに違ありません、種々の経験を踏み來りし母様は偉いものと思ふて居るに違ありませんが、其の慕ふ母

親、偉いと信頼せる母様丈に若し子供が知りて母親が御存じないといふ様な事柄が、一度や二度ならば兎も角有形に無形に常にあらはれますならば、賢い子供はすぐに母様を輕侮するの念を萌します、母様を輕侮するの念が段々強うなりますと、其の命令訓戒が餘り奏功しないのであります、其の命令訓戒が奏功しない様であれば、時に或は子供の一生涯を誤る様な事が起り易いのであります、だから子供を持てる母親は、常に子供の境遇を知悉して、其の質問に應じ、子供の心事を察して之れに同情するといふ事をつとめなければなりません、幼少な頃は兎も角少し生長いたしました子供は學ぶ學科は六ヶしくなるに連れて、母親と知識上の隔が出来て來ます、そこで生意氣盛りの少年、日を追ふて進む自己の智徳に比べて、日を追ふて後退りする母様を見るときに、之を侮蔑の眼を以て見るに至るは、止を得ない事と存じます、勿論家庭でも學校でも徳育に重きをおいて、修身

の時間や其他事ある毎に、よく話して聞かせはいたしますが、如何せん、子供心に起る輕侮の念は申々に口を酸くして言ひきかせた位で、奏功するものではありません、只之を防ぐは、母親が常に餘暇を見出して、新智識を得るの必要ある事を思ひます、子供がいかどの見識が出来るまでは母親は常に細心に注意を怠らないで時勢に遅れぬ様、或は雜誌に或は新刊書に、或は新紙に或は智徳高い人に就ての談話を聞き、時勢に後れぬといふ心掛が大切であります。今一つ母親が子供に輕侮され易いのは、子供に對して一般の母親の小言が多い故でありますまいか、マゝ大抵な母様が朝から晩まで、子供を見て居られるは宜しいが、子供の善行を賞するといふより、子供の惡戯に對して小言の多い事であります、中には惡戯のみではありません、御自分の勝手のわるい事に對して餘りに小言が多い故であります、それは四五人のおいたざかりの子供を持ちながら家事を治め機といたし

ますと、それ障子を破つた、それ簞笥に上つた、ソレ床に上つた、ソレ火鉢を引くりかへす、皆小言の材料でないものではありません、そこでするがまゝに任せておきまして、一から十まで小言を申しますと、子供心にお母さんは小言をいふものと思ひ做して、其の數多い小言は何等の功をも奏しない様になります、そこで母親は常に小言を言はねばならぬ様な事を、させぬ工夫をしなければなりません、それは子供の遊戯に腐心して、子供をして、愉快な幸福なものにしてやらなければなりません、これは母親の注意一つにある事で、母親が何等の思慮もなく、子供は一人で遊ぶと打ちやらかして居ては勿論、小言の材料を作る事が多いのであります、餘り關涉して窮屈に遊ばせるのも素より害が多いのでありませうが、私はなるべく子供自身に計劃させる様仕向けて、餘り手を下さないで大體に注意して居りますと或る時は、兄弟姉妹學校ゴッコをして、長子が先生となり、他の

子を生徒としておもしろくやつて居る事もありません、或は姉妹打連れて、他家を訪問すとして私の室へ姉は妹の手を引きながら御免遊ばせと叮嚀に挨拶しながら入つて来る事も御座います、或は植物園に遊ばんと庭園に出掛ける事も御座います、或はお菓子など請求しますから與へますとお菓子屋さんが出来て商賣の眞似事が出来た、或はお前が風儀が小常陸などと相撲の始まる事があります、或は兎を畜つておきますと、之を追廻して兎狩をして遊ぶ事もあります、或はブランコをし、或は負ふ競争をやる事もあります、或は木登りをする事もあります、其の木登りをする時、大きい子は宜しいが小さな子は足が足りないのです、肩を爲てと互に肩をかせるのであります、先日梅の木の下で、四歳なる女子が誰れか肩をしてと申して居りますと、大きな子は已に登りつくして誰れも居りません、頻に肩をしてと申して居りますと、三歳になる男児がマダヤット歩行き得らるゝ信サン

(子供の名)が肩をして上げやうと、小さい身體を梅の木の下に、シャガンで、姉を乗せましたが、重さに堪へられないで、痛い／＼と言ひながら、尙其處を退かないで、姉をのせました、其の様子の可憐なる、鍛練なる、何ともいへない一種の威に打たれました、矢張見るを友で、かゝる幼児でも皆大きな子のする事を見ては眞似て居るので御座います、母親はこの千種萬態の遊戯の大綱を握りて、其の心身に害ない限りは成丈彼等自身に工夫させて、思ふまゝに遊ばせる方がよくはありますまいか、斯様にいたしました、之が監視を怠らなければ、マゝ子供は愉快に遊べます、そして母の小言も少くなり、母の小言が少くおもしろく遊べる丈、子供は幸福なのであります、そして母親を侮る心などは起さない様になるのであります。二。

○食事の訓練

何處のお子様でも最も六ヶしい八ヶましいのは食事の事でありませう、日に三度〳〵繰り返す食事の都度、いやあれば嫌だ之れは好き、お菜が少ないとか、不味などが、實に際限もなく苦情の出る事があります、又其の作法につきましても、小さな手で食べるのでありますから無理もありませんが、よくコボスのであります、甚しい時には雪でも降つた様眞白にバラ〳〵とコボして居る事もあります、或は箸を投げる、茶碗を破す、お皿を投げる、汁をコボスといふ亂暴が演出されないとも限りません、ソコで食事の訓練は大切だから、一つ氣を付けよとの主人からの注意も御座いますし旁々私も氣がつかないでもありませんから、以前より一層の注意を拂ひました。先づ食卓につかせ食事をさせます時には、姿勢を正し、挨拶(頂きます)をさせまして、始めさせます、よく咀嚼

する様常に訓戒を怠りません上に、コボサヌ様に〳〵と申しますが中々コボサヌ様に頂けぬので、私は或時不剛思ひついて懸賞制度を設けました、勿論大きな子はコボシませんが此の懸賞に入れないで、小さい三人が一粒もコボサヌならば、菓子なり玩具なりを與へる規約をしました、サ一子供は大變コボサヌ〳〵ソレコボレルと賞が頂かれぬと一生懸命氣を付ました、其の爲め餘程コボス分量が減りました、しかし全くコボサヌ様にはまだなれません、ソレカラ時に一粒の御飯も百姓が粒々辛苦の結果なる事を話し聞かせ、或は米についての話、或は米の出来る稻の事、或は百姓の辛苦など話しますと、少し大きな子は、非常な興味を以て、聞きながら食事をいたします、又或は昔流の餘り御飯をコボスと眼が潰れるとか、おからをコボスと長者になれぬとか、祖母から聞かされた事を話す事も、極會にありました、其れについて面白い事があります。

いつで御座いましたか、五歳の女兒を連れまして學校の校友會に参りました節、餘興として彈琴の催しがありました、其の琴の師匠が盲目で御座います一生態命君が代を奏して、會員は片唾を呑んで聞いて居りました、一坐しんとして咳聲さへ聞えませんが、時に遙か會場の先の方の椅子に腰を掛けさせておきました幼女が何を思ひ出しましたか、サシ足ヌキ足で、私の所に参り、何か語らうとしますから、耳をかせますと、母さんあの人は御飯をコボシタのねーと申します、おとなりに居られる會員の耳に入つた人々は袖を口にあて、眞赤になつて笑つておいで、した。

實に子供に申します事はいつ何處で、何んな風にあらはれる事やら分りませんから、注意が大事だと存じました。

マー食事の作法につきまして、今迄成功しましたのは、口で訓戒するよりか、この懸賞方法が有効

かと存じます。

其れから食物の善惡好否等について、最も注意を要します事は、子供は何でも新しい物に接する毎に、一種の好奇心を以て之を知らうといたします、魚にしても、野菜にしても、豆腐にしても、卵にしても、子供の心に泛びました事は、ズン／＼質問いたします、或時は其の代價を聞く事もありま、或る時は品質の善惡を聞く事もありま、或る時は滋養か否かと聞く事もありま、或る時は料理の仕方を知りたす、其の雑多なる質問に應ずる時に毎に注意を要しますのは、無論子供の方から尋ねる程の事ならば、子供に分る程度に於て知らせるは必要の事と存じますが、其の知らせ方が下手だと子供が下品に流れ易いのであります、餘り下品になりますと、其の品性を傷けます様に思はれます、なせならば餘りに食物の善惡好否を知悉いたしますと、子供は只自己に都合のよいものばかりをほしがります、都合のよいもの

ばかりほしがる結果は或は幼少なものの分まで、すかして取り上げます、取り上げられたる幼児は又其の兄姉の眞似をする様になります、そこで一種厭ふべき風儀が醸されます、若し最初に於て、之を防ぎますれば、其の害は少ないで御座います、うが、只子供のする事であるから、何でもない位に看過いたしますと、或は將來災となる事がないとも申されませんが、そこで子供の質問に應じて食物の如何を知らせると同時に母親は子供の徳育について並進せしめなければなりません、如何に自己の好きな物でも、他人の所有物には一切手をふるゝ事が出来ないものであるといふ事を深く胸に刻ませておかないと子供心に只其の慾望を充たしたさに不徳な事を犯すのであります、所が餘り人の品に手をふれるなど、固く訓練いたしますと自己のものを他の人に與へるといふ事が出来にくくなり、之と同時に、人の困つて居る時に之に物を與へるとか、或は貸すとかの餘

裕ある心を持たせる事が大切で御座います。要するに子供の食事についての訓練は、姿勢を正し、よく咀嚼して、コボサエ様、膳に上る物品についての智識を與ふる時餘りに下品にならぬ様注意が肝要かと存じます。

外へ外へ (四)

○子どもを自然に接せしめよといふは、言ふ迄もなく花見遊散の意味ではない。又必ずしも名勝見物の意味でもない。もつと眞面目に、もつと謙遜に、自然の表面の美を樂しむばかりでなく、自然そのものの眞率な感化を得させよといふ意味である。名所へゆかねば風景がない、自然の享樂がないと思ふのは世に心なき人々のことである。心ありて見れば一々花を名所に訪ふ必要もない。春光四隅に充ち溢れて。行く處として居る處として春興ゆたかならぬはない。たゞ閉ぢこもりてのみ、我れから自然に背けば、自然も我れに背くのである子どもに自然を興ふるも亦然り。草のある處、日のあたる處即ち皆よろし。何も自然といへば直ぐ景勝のことのみ解してはならぬ。

新入園児の取扱方(二)

(一)

東洋幼稚園 岸 邊 福 雄

新入園児を取り扱ふ前に、まづ、その伴れて来た母親を試験することが大切であります。母親に、子供の事を、いろ／＼聞いて見るのです。そして、その答によつて、大抵、その子供の性質を知り、その育て方を観察するのです。

子供が、家庭で、男性的に育てられて居るか、女性的に育てられて居るかといふ事を見わけるのが先決問題であります。それは、母親と、話して居る中に、自然にわかります。

一番困るのは、はにかむ、泣き虫の子です。やんちゃ、亂暴は、容易に、共同生活に入る事が出来るけれど、はにかみの泣き虫には、最も困らせられるのです。それで、そのはにかみの泣き虫の

取り扱ひが、やがて、新らしく入園する子供の取り扱ひと云うてもよい位です。

次に、勝ち氣の子か、負けざらひの子かを観察しなければなりません。勝ち氣と、負けざらひとは、違ひがあります。勝ち氣の子は、凡べて、積極的で、負けざらひは、消極的であります。勝ち氣の方は、しやすいが、負けざらひはむづかしいのです。神經質で、毛ざらひをする、神經過敏で、感じも早いから、先きを見通して、物を恐れる、なか／＼困難です。

母親に、かういふ事を聞くのです。「御飯は、澤山あがりますか」「大變いたいます」といふ母親もあり、「大抵、三つ位」と數を云ふ人もあります。

「御飯は、ならしてあがりますか。むらがありますか。」「神經質と、見當をつけて居る子供の母親は、「むらがあります」といふ。そんなのは、「肉や、魚類は」と聞くと、「あまり、好みません。」「それでも、お肴の中の、おさしみのやうなものは、お

好きでせう。「はい」「おまんぢうのやうなものは、あまりお好みにならないでせう。」「はい、果物の方を好みます。」

話して居る中に、その母親が、どれほど、注意ぶかいが、どれほど熱心か、また、どれだけ、わけがわかつて居るか、どうかを見る事が出来ます。だん／＼、話がすゝむ中に、母親は、子供のわるい方面を、一々かぞへたてます。行儀がわるくて困る。あばれる、亂暴をする、おもちゃをこわす。と、さん／＼の棚おろしがはじまります。黙つて聞いて居ると、次に、その反對に、子供のよい方面を告げるのです。「お菓子をもらつて來たら、姉にもわけてやります。」「衣服も、あまり、よこしません」ととりとめもない處まで、はめたてます。實子か、さうでないかは、こんな間にも、観はれます。むやみに、わるく云うて、むやみに、褒めるのは、大抵、實子で、よい加減なのは、義理の間でなければ、相當の考のある人です。かく

して、凡そ、子供の性質、境遇を観察します、そして、いよ／＼、入園児の取り扱ひといふ事になるのです。

まづ、子供のお辨當の喰べ方を見ます。開らく時に、そのお辨當は、母親が、手を入れたものらしいか、女中まかせのものらしいか、注意して見るのです。次に、子供の喰べ方を見ます。上手に、喰べるのもあれば、だらしなく喰べるものもあります。こぼす、こぼしたのを、どうするか、見て居る、相當に、家庭で、注意してある子供は、それをひらふ。中には、澤山こぼしておいて、「拾つて御覽なさい」と云ふと、わい／＼泣き出すものもあります。次に、ぶらんこに乗つた様子を見ます。始に乗るのは、こしかけぶらんこです。女性的の子供は、大に恐れる、男性的のは、さつさとおもしろさうに滑ぎます。それから、友達を定めてやります。一週間きめてやります。古參のやさしい、世話をしてくれさう

な子供をたのみます。新入の子供とは、組が違ふけれども、違ふなりに遊んでやつて、その子供が座ることを教へ、お辭儀の仕方をお教へてやりますそんなにして居る中に、だん／＼幼稚園の生活に慣れて来て、古參の子供の手をはなれて、相當の友を、自ら撰ぶやうになります。はにかむといふ事は、なかく／＼なほりませぬ。年と共に、其度が進むやうです。伶俐になるといよ／＼はにかむ。これは、容易になほりませぬから、その儘にしておきます。泣き虫も、そのまゝにしておきます。私の園では、毎月入園をゆるします。それから、最も他の幼稚園とかはつて居りますのは、最初の組は、先生の命令を聞かなくてもよいと、きめてある事です。(これは、多年の経験に鑑みて、よほど、思ひきつて、定めた規則です。)その上の組が半分開く、その上のは、命令の全部を聞くといふ事になつて居るのです。始めの組は、折紙はいやか「いや」「諾」といふ風に、我儘が通る。その代

りに、その組は、赤ちやんの組です。赤ちやんは子供に取つて、不名譽の至りである。それで、赤ちやんの組に居たくないものは、次ぎの小兄さんの組になる、そこで、命令の半分をきかねばならぬ。小兄さんでも満足の出来ぬものは、大兄さんの、命令の全部にしたがふ組には入るのです。かういふ風になると、子供に、無理がありません。附添ひ人を、どうするかといふ事は、大分重きをおかれて居るやうですが、これは、大した事ではないと思ひます。道の都合などによつて、随分不便なのがありますから、子供について来て、つれてかへるだけならば、差支ないと思ひます、無論、始終、そばについて居ては、子供に依頼心を起させて、保育上よくありませんが。私の園で、有名になつて居る話があるので。それは、數年以前のこと、五歳になる男兒の、強情づ張りの、甘えつ子が、或る幼稚園には入つたのです。ところが、その保母が、いきなり、お辭

儀をせよと命じました。その子は、お辭儀が大きな、いくらせよといはれても、しません、遂に、お辭儀をしなくてはいけませんと叱られて、わい／＼泣き出しました。わい／＼泣きながら、母親に負ぶさつて、遊戯室には入りませんでした。そこで、先生に、また叱られた。「こゝは、わい／＼泣きながら、は入る所ではありません。」と今度は、外に出て遊びました。なか／＼のいたづらつ子で、庭の山の上を、ころ／＼ころがつた。おもしろいからお仲間が出来る。皆の衣服がよごれる。先生は、三度、禁止の命令を發せられた。その子供は、どうしても、その幼稚園がいやになりました。母親は、大層心配せられて、ある日、宅へ来てかく／＼の次第で困つて居るから、どうぞあなたの幼稚園へ入れてもらひたいと頼まれました。私も、困つたと思つたけれど、まあ、連れて来て御覽なさいと答へました。それで、翌日、子供は、両親につれられて来ました。門の處まで来て、「僕の幼

稚園は、こんなけちなのでない」といひ出した。ところが、私の園には、馬車があります。子供を乗せてあるのです。それを見つけて、やつと、足が進んで、は入つて来ました。そして、三日も、四日も、お辭儀をしない。お辨當も、大勢一所には、喰べない。別の室で、ひとりつきりで喰べる。科目になつて居る相撲も、一月位取らない。私とだけならば取る、それも、大勢の前ではとらない。そこで、私は、皆が歸つてしまつてから、三十分位づゝ、特にのこつて、其子と相撲をとりました。こんなにしてとる相撲に、私は、いつも負けなければなりません。こんなにして、だん／＼、その子と、仲よしになつて、その子も喜んで、園に来るやうになりました。ところが、或る日、その子供が、馬車に乗つて居りました。恰度、馬車をしまふ時刻でしたから、あぶないから、お降りなさいと云ひました。どうしても降りませぬ、仕方がないから、抱きおろしました。すると、子供

は、大音聲で、泣き出しました。私は、叱らうか、どうしようかと考へましたが、危いからお降りなさいといつても聞かないから、おろしたのに、なせ泣くのです」と厳しく叱りました。こゝに於て、私の信用は、地に墜ちまして、二三日は、園にも来ませんでした。母親が、「なせ、あの時、泣いたのか」と聞きますと、子供は、「先生は、あふないと云はれたけれど、私は、しつかり、つかまつて居れば、決して、あふなくないと思うたから、おりなかつたのに、無理におろしたから、泣いたのだ」と云つたさうです。私は、これを聞いて、實にわるかつたと思ひました。子供は、それ相應に、ちやんと、道理をもつて居るのに、絶対に、命令に服従させやうとしたのは、如何にもわるかつたと思ひました。私は、大分、骨を折つて、仲直りをしました。その後、おひく進んで、遂に、すなはな子になつて、去年卒業しました。卒業の時は、大勢の中で、歌をうたつたり、芝居までし

ました。こんな子供でも、個性をよく研究して、適當な保育をすれば、蛇度、その効果は見られるものです。要するに、よく、個性を観察して、一人づつを扱ふやうな心もちで、大勢の子供を扱ふ事が肝要です。綿密に考へるならば、どんな子供でも、それ相應の取扱ひ方を考へ出すのは、あまりむづかしい事ではありますまい。(談話)

(二)

日本橋常盤小學校
附屬幼稚園 橋本 はな

私の園では、入園の當日、校長から、その父兄に、一通り、子供についての注意をお話せられます。新入園兒と申しました處で、極、小さいのもあれば、學齡近いのも御座いますので、(これまでは、一つにして居りましたが) 昨年あたりから、來年度の學齡兒と、その外のとほ、別にして居ります。東西もわからぬ子供が、始めて、母親の膝下をはなれて、知らない處へ來るのですから、そ

の信用を得て、なつかれるやうになるまでには、なかく骨が折れます。子供の性質を見て、いろ／＼に取り扱ふて居ります。

附添人は、あんまり、泣きますの、外は、始めでも、室内に入れぬやうにして居ります。附添人がついて居ても泣くのは、庭か、廊下で遊ばせませす。はじめは、上の組の歌を聞かせたり、お辭儀の一つもさせて、名簿をよんで、返事をさせませす位で直に、外へ出して遊ばせませす。おひ／＼慣れてまわりましてから、積木だの、折紙のやうなものをさせませす。これも、さうしなくてはならぬといふのでなく、随意にさせるのです。

玩具も、機械的のものでなく、なるべく、子供が、手で動かす事の出来るやうなものを、氣をつけて、撰んで居ります。雨天には、幼年書報を見せたり致します。凡べて、命令的でなく、自由にさせませすのです。暖かくなりますと、砂場に出て遊ぶ事もあります。遊ぶ間は随意にしておきます。

それから、衣服は、なるべく、運動をよくさせる爲めに、よごれてもよいのを着せてもらふやうに父兄にたのんで居ります。紙と、手拭きは、必ず、もたせるやうに致して居ります。

附添人は、待つて居ります間、必ず空手で居てはならぬと云ふ事になつて居りますので、皆その控室で。裁縫なり、編物なりいたして居ります。凡べて、恩物の取り扱ひなども、自由に、自分にといふ事を主と致しまして、決して、強ひませんのです。石盤と、石筆と、石盤ふきとは、始終もたせておきます。四角や、三角の物の形を畫いて、喜んで居ります。玩具も、あれが出してもらひたいと云へば、どれでも出してやる事に致して居ります。(談話)

(二)

神戸幼稚園 佐藤 滿 壽

○入園前に於ける體格検査 三月中旬それ／＼

入園申込者へ通知致しまして體格検査を行います
 として其結果心臓病腦病トラホーム其他傳染病等
 の如き者には入園を拒絶する事に致して居ます此
 検査は五六年前から實行致して居ますが腦病の子
 供をとらない事に致しましてからかきむしつたり
 たゞきあつたりする事が殆んどないといふ位にな
 りました此體格検査の結果として愛兒に思ひもよ
 らぬ病ある事を發見されて喜び治療を受けて健康
 に復するもの年々殆んど志願者の一割に達します
 殊にトラホーム心臓病には父母の知らで過すもの
 頗る多きものでありますから餘程有効であると信
 じます其他幼兒の附紐のかたきこと摩着をさする
 事牙齒の不潔耳つまり等の不注意をしらす事が
 多々御座います

○入園期 右の様に致しまして體格検査に合格いた
 しました者を三部に分ちまして一部は四月一日に
 一部は六日に今一部は十一日にと三度に分けて入
 れる事に致して居ます尤もこちらでは百五十名定

員で御座いまして半数以上は學齡兒で御座います
 から毎年五月には八九十名も入園致しますので御座い
 ます

○最初の仕事 入園致しますと先づ最初には自分
 の席と下駄の置き場所と便所と鐘がなれば席に着
 く事を覺えさせます次には強い子は泣かないもの
 泣けば弱い事がわかるといふ事をよく話して
 きかせますそれで最初に教へます歌も「泣くな子
 よ強いよい子は泣きませぬ泣けば弱いがよくわか
 る」といふので御座います

○遊ばせ方
 家の近所の子供を紹介して共に手を引かす事
 己になれたる子供の性質を見計ひ友達にさする
 事
 幼兒の獨りにて出來得る手技(大なる圓を帖る
 事連鎖等)をなさしむる事
 共同遊嬉はひらいたを第一として手を引いて歩行
 するに馴れさせ兩三日を経てはかじめの如き簡單

にして變化多きものより始め凡そ十分間位づゝこれを見させます。これは始めての子供には珍らしく又自然に早く模倣する事になります。お話は幼児の一番好むもので御座いますから繪本を見せたり掛圖切抜畫などをいろ／＼にして用ゐ話したり話させたりにしておもしろく遊ばせませす。一ヶ月位で殆んど全部よく馴れます。

○附添人 二三日間は附添を許して居ますが中には初めから一人で居るものも御座いますしおそくも一週間位致しますと全都おくり迎に致させて居ます。

○お辨當 は幼児の尤も楽しみに致して居ます。事で御座います。特に新入幼児にとりましては家庭に居ます時の様に食事の間に何も頂きませぬのとお辨當といふ事が初めてなもので御座います。珍らしいといふ所から皆々何よりの楽しみに致して居ます。事ですから平日よりは二三分は早く初

める様に致して居ます。序ながらお辨當の事で思付ましたから一寸申上ります。

先々號で御座いましたか「體育と衛生」の中にも御座いました通り幼児に冷たい御飯を頂かせます事は衛生上よくない事と至極御同感で御座います。こちらでも暖爐の上に圓筒など造り種々の方法を試みましたがどうも下の方があまり熱くなりすぎたり上の方が冷たかつたり致しまして思ふ様に参りませぬ所からいろ／＼工夫を致しまして昨年の春高さ二尺三寸巾二尺深さ一尺二寸の木箱（内都はトタン張）を造らせました。其中は二段の金網をはり之に幼児のお辨當を袋に入れたまゝで置させます。下には火鉢を入れておきます。そして其ふたには火の消えませぬ様に上下に穴をあけておきます。此様なもので試して見ました所が誠に好結果で御座いました。だから只今では右の様な箱を二個用ゐて居ますがパンを除きまして幼児全體のお辨當を暖めるには充分間に合つて居ます。其上火鉢に入れ

ます火も僅かです全體によく暖まれます此箱の代價は一個四圓八十錢位で出来上ります然し此他になほよい方法を御實行になつて入らつしやる御方々には御をしみなく御しらせを願度と存じます

○陳列室 陳列室には模形刺製の鳥獸等の外玩具やら繪本やら普通家庭に於て弄ぶもの糸とりきしやご、おてだま、まり、等を取り出し得る様になしおき毎日保母一名交替に之を監督して自由に使用させて遊ばせます存外とり亂しもせず喜んで遊びます當園出身者にて大學に學べるもの海軍に職を奉ずるものなど参りまして彼の繪のゆきたるまはまた忘れません今もありませんかなど、申しました事が御座います

○毎朝の會集 會集の時間は夏は八時半冬は十時頃に致します此時の指導者は園長自身にさるゝ事になつて居ます唱歌や行進なども勿論御座いますが多くお話をなされまますお伽噺中にも西洋のお伽噺は殆んどない位でありまして多くは日本の歴史

中のおもしろい事を極やさしく話されるので御座います數回くりかへし話されますが喜んできゝます又は保母が各自の室に於て話しました簡單なるおもしろき話を受持の幼兒に役割して話させたり自分らにさせたり致します例へば人が人を助けたる事なればほうたいなどするまねを子供がするので御座います他の組のものはおもしろがつて見て居ます事も時々御座います園長は會集に於て幼兒によい種をまかねばならぬと申て居られます此間の時間は大凡二十分位から四十分にもなる事が御座います

○庭園 當園は敷地四百六十八坪其内建坪百八十五坪空地二百八十三坪で御座います狭い場所に山があり池があり崖がありますから實に都會の幼稚園は庭がせまくて困ります如何にして有益に利用し得るかといふ事には常に苦心いたして居ます幸に諏訪山に近く半日の清遊には適しますが野外は年々人家建連つて子供の爲には不幸で御座い

ますこの園の二うねのむぎ池の中の二十株計りの
 稻は鶏の餌には足りませんがあらゆる空地に年中
 まかれたる菜種大根は兎、鶏、雁等の食料には十
 分で御座います幼児は毎日大きくなれる分より抜
 きて與へ居ますあもう少し廣々としたる庭のほ
 しいこと、つくづく感じます

(四)

○幼稚園日記

(新入児の初め一週間)

双葉女學校 後藤りん

四月一日、月曜日、曇

今日は學期の初まりで幼稚園も新入が却々多い、
 幼児は今日初めて家庭を離れ、社會の交際場裡に
 立ちまじる、初舞臺若くは初陣とも云ふべきであ
 りますから、一日不安の面持ちで附添人にひたと
 寄り付き居るもの、怖いもの見たさに袖の下から
 覗き居るもの、保姆に年や名前を聞かれて羞かし
 さうに顔をそむけるもの、逃げ出すもの、甚しき

は泣きたすもの、初めから一つ場所に凭りかゝり
 少しも動かぬものやら、適には入馴れて附添に下
 を曳かれながら此處彼處と見物して歩くもの、
 又は親しき友に遭つて、さも、懐かしさうに亦茶
 かしさうにして居るものやら、恍惚として人の撥
 ね廻る有様を熟視し居るもの、籠の鳥でも放した
 やうに無暗矢鯨に飛び廻るもの、家を出る時は大
 威張で出たのだが一人殘されて、何んとなく淋し
 くて、大聲揚げて叫き喚くもの、今の今まで親にせ
 がんで入園をしたのだが、扱て幼稚園に来て見る
 と急に氣まり悪くて拗ね出すものと、それはく
 色々で各家庭の躰け方に依て小供の仕草が皆違つ
 てゐる、それと同時に家庭の狀態が略ぼ推察が出
 来て却々面白いものであります、今日は皆一つ所
 に集つて極く小供らしい、極く簡單なお話をして
 あしたは今日よりもよく面白いことをして遊ぶ約
 束で唱歌を唱つて歸へつた、唱歌も君が代をやつ
 と、唱つた、五色の聲と云ふけれども、什麼して

今日は十色位の聲が出た

四月二日、火曜日、晴

昨日保母から少し安心の出来るやうな話を聞かせられたので、小供も大分落ちつき人馴れても来た、それでソロソロと小活動を初める、什麼しても家庭が自由放任主義だと、小供も早く手が離れて直に友をつくるやうになるが、扱てこれと反對な家庭で、多くの婢僕にかしづかれたり、あまり愛に溺れ過ぎたり、虚榮の強い母親に育てられて小供は、兎角強情で我儘で偏屈で其上に依頼心が甚だしいのだから、人に容れられるのも遅く、又人に懐くのも却々遅い、扱て前日の約束もありますから、保母も今日は大車輪で成る可く家庭の遊戯に懸隔のない飯々事や、人形いちり、砂遊び、自由積木、摺紙などで遊ぶだが、什麼も未だ氣ま悪い方が七分と云ふ具合ですから、どちらかとも云ふと、あまり烈しい活動よりも活動の少ない、積木とか、摺紙などが大講て、倦ます厭かずと云

ふ所で自由に遊ぶで歸へつた、あしたの神武天皇祭は如何なる旗であるかを、極くく簡單に話して歸へした

四月三日、水曜日、神武天皇祭

四月四日、木曜日、快晴

小供でも却々用心深いもので今迄家庭で他人まぜずに遊んだ兒は人懐きが尤も遅い、如何に手を替へ、品を替へ、誘導しても些の活動もせずに隅の方で人々のすることを、じつと觀察してゐる、そして何に事も自分の胸に得心することが出来る様になると、初めて玩具を弄つたり、人と話もして見たり、そろく附添の側をはなれて一人遊びをする様になる、それが早くて一日二日遅くて一ト月位かゝるものもある、最もこれは小供の自然になつくのにかかせた時期であります、然かし大抵時期を見計ひ保母の用心で強行手段をやる(これ何程其幼兒が泣いても、かまわずに附添を離してしまふのである、そしてこれを斷行する保母に意志の強い一寸頼みのあるもの、宜し)これは一寸酷なやうであります、左程酷でな

いのであります、なせなれば幼児は最早自分だけの
 交際場裡は思ふたよりも不安でないことは分つ
 て居るのであるが唯今迄での習慣上何んとなく
 心淋しく思われるので我儘をやつて居るので、丁
 度小供が母親の乳を何時迄も弄り付けると一寸で
 も觸て見なければ寐られぬのと同じ道理で、一度
 意氣地なしと強く叱られると自分ながら辱しく亦
 馬鹿らしく感じて、それぎり止めると同じことで
 あります、それは不思議な位直ります、什麼も日
 本の家庭は母親の意志が誠に弱く愛に溺れやすい
 ので、人として大切なるとして幼児のうちから躡
 けなければならぬ服従、規律、忍耐、獨立などは
 少しも養成されてゐないので困ります、今日は新
 入生も大々人馴れて来て、過半はこそりくと隅
 の方で小活動をしてゐる、誠に心持ちの好い天氣
 でありましたから庭に出て金魚に餌をやつたり、
 色々な草花を採つて来てベンチで人形と飯々ごと
 をしたりして遊んだ、そしてお辨當を喰べてから

は隠れん坊が盛に初まつた、が大々嫌きた様子で
 今度は書合せ骨牌が初まつた、大に皆んなの氣に
 かなつて又あしたもネと約束をして歸へつた

(當幼稚園は如何なる玩具でも大抵なもの成
 るべく備へて置くやうにしてありますが、但し
 實用的のものが多く裝飾的のものは第二に措く
 として戸棚でも引出しでも箆でも皆小供が自由
 に持ち出すことの出来るやうになつてゐる)

四月五日、金曜日、快晴

大分今日は新入生も愉快さうに、活動して来た八
 時半と云ふに最早皆登園して来てゐる、ある團體
 は積木を盛に積み上げて如何にも面白さう、或る
 團體は繪本をひろげて熱心に視入つてゐる、又或
 團體は獨樂廻して夢中である、或る團體は電車ご
 つこで走り廻わつてゐる、ある團體は叔母様ごつ
 こでさも楽しさう、又運動場のある團體は今や
 鞞鞞の真最中、こちらの團體は砂池に這入つて盛
 に陸道、堤防を築きて得意満面に笑をたへて遊

ひで居る、こちらの園籠は草花を摘み、蝶を追ふて嗜々として飛び廻り、或は輪とび、鞠つき、鞠投げ、とそれは、面白さう、天気も昨日にましての好天氣で監督者の吾々も共に天國に遊んだやうな氣がした、今日の午後は皆んな一ツ所に車坐になつてお話をした、それはある幼児の望むだ金太郎ちゃんのお話であつた、新入生にしては却々眞面目に聴いてゐた終りに深呼吸法により大伸びをさせ、金太郎さんの唱歌を唱つて威勢よく解散した

四月六日、土曜日、曇天少風

今日の新入生の状態は昨日とあまり違はぬ様であつた、凡て人は大人でも少人でも一時の變化を喜ぶものであるけれども五六日たつと又もとの境遇を思ひ出して、何んとなく淋しく、うら悲しく感じるものであります、小供も矢張其如くで昨日までは大に活動して愉快に遊んで居つた兒が、今日は急に幼稚園が嫌やになつて今迄一度も泣かなか

つた兒が大聲出して泣きたてると云ふ様なことが間々あります、之れは俗に云ふお里戀ひしと云ふので必ず二三人はあるのであります、扱て此お里戀しやの原因は何んであるかと云ふに、先づ第一は勝手な時に口腹を充たすことの出来ぬのが一大原因で大人でも同じこと、初めて家を出て奉公や兵隊に往て一番悲しく思ふのが此喰べ物である、それから、第二が規律、これも家庭は幾何程規律があつても、亦幼稚園が如何程家庭的であつても多人數と少人數では規律のとり方が幾等か違ふ所がある、第三は服従、これも家庭では如何程厳しくなさる様でも幾等か我儘を通させるところがあるが、幼稚園ではそれが出来ない、第四は依頼これも家庭では自分相當に出来得ることも婢僕のあるところでは半人からして遣らせぬことがあるのでありますから、上流の家庭程小供に依頼心が多い、幼稚園ではそれが出来ぬ、扱て此點は大人も小供も同じことなので、まして親の膝元を離れ

たばかりの乳呑兒のやうなのでありますから實に當然なことであります、故に保姆たるものは此小供の心を斟酌してあまり無茶苦茶な小言などは言はぬやうに除々に懐け、正直や服従とか規律、忍耐、獨立と最早此時分から別に教ゆると云ふのはありません、知らず識らずの裡に良い習慣のつくやうにしなければなりません、今日も外遊がお重で席を程よき所に敷き瓦かけを摺つてお砂糖や薬や、お壽司やなどこちらの方では砂場で滑稽なる相撲とりが初まつてゐた、部屋に這入つてから摺紙で極く／＼簡單なる金太郎さんを拵へて大悦びて歸へつた。

外へ外へ(五)

手に餘るげん／＼のたば捨てにけり (子規)
摘草やよき衣きたる女の童 (同)
幼子や青きを踏みし足の裏 (同)

保育の實際

○文字を書く幼児

京都市嘉樂小學校 藤田東洋

一、幼兒の文字を知り來つた所以
幼兒の文字を知り之れを書くと言ふのは人の真似をなしたのに過ぎぬ。即家庭に於て兄弟のなせる事を見聞して模倣性に強き彼等は好奇心にかられ之れを曲みなりにでも自慢らしく之れを書かんとするのである、其書いたものを周圍の者共に見せ其褒め言葉を得て得意然として益之れを書かんとするのである。
要するに子供の境遇及外來の刺激に依て覺官的に知覺したるものである。併し大多數の者が文字を書くや否と言ふにそれは少數に過ぎない。余のテラホラ聞く所に依ると或幼稚園は保育終了後直に尋常小學一年へ入學することであるから子供が

書けばこれを賞賛して獎勵することが小學校へ入學する豫備として適當なる事と考へて居るらしい之れは以ての外であると思ふ。

二、此幼兒の取扱をどうする乎

此文字を書く幼兒の處置をどうするかと言ふに獎勵すべきものであるか禁止すべきか放任すべきかの外に出でない。此時代に於ける幼兒は其心身が甚だ未熟なものである。然るに或人曰心身發達に多大なる害が無いから之れを獎勵し助長して餘り差支なしと故に禁止する必要はないと吾人は思ふ。此時代は文字を書くべきものでない。獎勵すべきものでない。文字を知らぬが當然の時代に於て文字を知つて居るのは之れは父兄などの面白半分や我が子を小學校へ入學させてからよい位置になる様にと教ふるなどは不自然の事である。教へて害なしと言ふ人もあるが、強ひて教ふるは子供天性に背くのみでなく、身體の發育旺盛なる時に其様な方面に頭をつかはすは早熟である。なま

半着で害がある。文字は此時代を過ぎて學齡に入つて後知らしめたり書かしたるものが適當だと思ふ。然るに未だ保育時代の子供に文字云々は稍早熟の傾向と言はねばならん。

自己の思想感情を他人に發表し他人の思想感情を發表したものを知るのは文字である。此様なものを幼兒の心身發達の程度に不相應な事をやらせ之れを獎勵する時は幼兒は益勵まされ得々然として書き又知らんとする考を起し、腦を過度に高尚につかひ、所謂無邪氣な點を缺く恐れがあると思ふ。大多數の幼兒は文字を書くべきものでない。だから本人の欲する儘に放任する事がよい。家庭へもよく注意して置いて獎勵などは毫頭せぬ様にし、より以上効果ある遊戯に親します方が一層教育的ではあるまいか。

幼稚園の事業は家庭に勵し學校教育に屬するものでない。幼稚園は家庭教育の及ばない所を補ふものである。決して之れを學校教育のやうに同一視

してはならぬ。家庭教育の補助機關たることを念頭に置かねばならぬ。此考へでフレイベルの教育主義の天然の法則に従つて發育せしめ教導せねばならぬ。ハールマン氏の言ふ様に未來の生長を害ふ様な雜草たるものは刈除せねばならぬ。幼稚園は能く遊ばせ彼等の既有的の思想を整頓すると共に、自然物に接觸するの機會を多くして能く直覺させ幼兒の心身を圓滿に發達させ善良な習慣を着け、且小社會に接觸して共同生活になれしめねばならぬのであるまいか。世人の言ふ今の幼稚園は種々なる事を教へ早熟に失して遂に苗を助けて長せしむることがある。餘り早くから組織的に具案的に種々なることを教へて幼稚園の成績を擧げやうと思ふのは誤解の甚しものである。要するに幼兒が字を書くとて之れを獎勵し全く禁止したりするのは教育的でない様に思ふ放任主義を採るのが策の上なるものでないかと思ふ。

○自由保育

精華學校幼稚園部 鈴木マサ

此頃のことでは御座います。全幼兒に折紙組紙などを與へて一齊に手技をさせて遊ばすといふことは、それは或幼兒にとつて眞に効果が無いのみならず、却て苦痛であつたことを實際に見とめたのでございます。其子供が家に歸つたとき前掛のポケットから組紙で作つたものが出て居りまして、家の人がこれは大そうきれいだね、お前が一人で作つたのかと尋ねましたら、一人で作つたことは作つただけれども實は、お友達が皆さんこしらへていらつしやるし、又先生も一緒になさいとおつしやつたからいやで〜たまらなかつたけれどしたのですと思つたまゝを答へました。このことを實際に聞かされた私には随分つらかつたのでございませう。幼兒に對して氣の毒な感じがいたしましたので御座います。遠慮なしに皆の子供の心を露らせ

たら、他にもこの子供と同じやうに思つて居つた
 子もあつたらうと考へたとき、赤面せず居られな
 かつたので御座います。誠にこの一言は幼児から
 新しい保育法（隨意でしかも自由にすることの効
 果あること）を教授されたやうな感じがいたしま
 した。それで一齊に同一のことを同時に強てさせ
 て遊ばすことの餘り有益でないのみならず、不自
 然ではないかと感じたのでございます。それから
 は務めて幼児の自由に任せて手技の材料が有益に
 用ひらるゝことを計る積でございます。今日も折
 紙を全幼児に與へまして自由にいたさせましたら
 其時こしらへたくない子は勝手にポケットの中
 に入れてしまひましたが、午後になつて其折紙を
 出して隨意に玩んで居るものもあれば、保母に何
 々を作つてくれと要求するものもあれば又は友達
 と一緒にやつて折つて居つた子供を見ました。か
 くて始めて折紙を與へた効果を知つたのでござい
 ます。

其ほか昨日も庭園で隨意に遊ばせて居るとき眞五
 名の女児と二三名の男児とがしきりに地面に石で
 書き方をいたして居りましたから、黙つてしばら
 く様子を見て居りますと、男女ともなか／＼面白
 さうにいろ／＼なものを書いて居りましたから、
 紙と鉛筆をあげませうかと尋ねましたら喜んで下
 さいと申しました。すぐ臺などふいて用意をしてや
 りまして、尙他にも書きたいものは手を洗つてい
 らつしやいと申ましたら書きたい子供はさつ／＼
 と砂場の道具など片付けて手を洗ひ紙と鉛筆をも
 らひ隨意に餘念なく書いて居りました。終りまで
 書かなかつた子供も随分居りました。（十四五名）
 其子供たちを見て居りますと又各々異つた遊をし
 てなか／＼面白さうに見えました。これが眞に子
 供にとつては満足であつたこと、感じたのでござ
 います。この後もこの方法で保育して見たいと思
 つてをります。これは隨意遊戯の子供にとつて大
 切であることを経験いたしましたのでございます。先

きに申ました四五名の女兒むすめの書かに注意ちゆういいたしましたし
たら地面ぢめんに書かいたやうなものが書かかれてありまし
たことを一層いっしょう面白おもしろく感かんじたのでございます。され
ど以上いじやう申ましたやうにいたしますことの、其内そのうちに
多少たせうの利害りがいの伴ともなうことゝ信しんじて居をりますから、な
ほく研究けんきゆういたして見みたいと思おもつて居をります。

外へ外へ (六)

娛あそしき倍ばいと、かたことに
嬉うれ々とうたふば誰たれが子こぞ、
母ははの譚たんりに捕とらはれし
かよわき兒こ等らも放はなたれて
今日は鋭えいき風の
やみて解とけき春はるの野のに
心こゝろのまいにゆるされて
汝なれの呼よ氣きを味あじへり。

(ワオルツオース)

桃太郎

ト調 2/4

1 1 1 2	3 1	3 3 3 3	2 0
モモタロ	サノ	オトモニ	ハ
3 3 2 2	1 1 1	6 1 6	3 0
イヌサル	キジノ	サビキ	ヨ
3 3 3 3	3 3 2	3 3 6 6	3 0
オトモノ	ホービハ	サニヤラ	ウ
3 3	3 2	1 1 3 2	1 0
日 本	一 ノ	キビダン	ゴ

保育資料

新遊戯法

飯沼 静

「桃太郎さんのお供には」の歌の間手を腰にとり

桃太郎の遊戯法

吹きなす喇叭

1. 1 1 6	3. 3 3 3	1 3 1 0
フキナス とーりの	ラツバハ なくこゑ	ラッパ テト ッパッ
3-6 3	3. 3 3 1	3 3 3 0
グッタイ きつねは	スナメヤ なきだす	一ニ三 こんこん
6. 6 3 3	3. 3 3 1	2 3 1 0
ウチダス いぬは	タイハ はえたつ	ドンド ドンド ドンド

足踏をなす「大猿雄子」の時、兩手を前方に出し
 一二三と指折かぞふ「三疋よ」にて兩手をおろす
 「お供の褒美は」の間腰なる袋より物を取り出す
 状をなす「何やらう」にて勢よく兩手を取り出す
 し、黍團子を與ふるに擬す「日本一の」にて右手を
 あげ指にて輪をつくり團子の様になす「黍團子」
 にて團子を丸める状をなす、

吹きなす喇叭の遊戯法

第一、「吹きなす喇叭はラットトラ」を唱ふの間、兩
 手を握りたるまゝ、口邊にあてがひ喇叭を吹く状
 をなす「軍隊進めよ」にて右手にて斜に上を指
 し「一二三」にて足踏をなす「打出す大砲」に
 て兩手を握り左手のみ前方に出し其方向に注視
 せしめ「ドンドンドン」にて引き金を引き弾丸
 を放つ状をなさしむ、
 第二、「鶏の鳴く聲ケツココ」を唱ふる間、兩手を
 半ひろげて翼を動かす状をなさしむ「狐は鳴き
 出す」にて兩手に各狐の頭の形をつくり「コ
 ンコンコン」にて口を開閉する状をなさしむ「犬
 は吠え立つ」にて兩掌を合せて犬の口に擬し「ワ
 ンワンワン」にて拍手す。

ニ調

途上だより

倉橋生

○はぐゝみ

不意に子どもの泣き聲がしたので、読みかけて居た雑誌から目を移して車内を見まはすと、其の泣き聲は、むかふの隅に居る若いおかみさんの背の子から起つたのであつた。おかみさんは手を後ろへまはして、頻りに揺つて見るけれども、どうも泣きやまない。愈々はげしく泣き出すばかりである。おかみさんはとうとう子どもを抱きおろして膝の上へかゝへて、いろいろあやしても中々泣きがとまらない。若いおつかさんは殆んどもてあましきつて閉口して居る。

私の一人おいて隣に、まだ若い尼さんが居た。さつきから優しい顔で此のさまを見つめて居たが、つと立つて彼のおかみさんの傍へ行つた。おつかさんと軽くその子どもの頭を撫でながら、袂か

ら小さい菓子を取り出して與へた。此の尼さんは子どもに對して特別なやさしい手練をもつて居るのか、子どもは直ぐに泣きをやめた。

おかみさんは喜んで、子どもと二人分の禮をのべた。尼さんは其の隣へ腰をおろして、なを子どもをあやしなから話し出した。

「私は子ども衆が大すぎで、いつでも外へ出ます時には、きつと袂へお菓子をに入れてあるきます。

ほんとに子ども衆位いゝものは御座いませぬねえ。私は衣の身で生みの子は御座いせんが、我家には可愛いゝのが三人待つておいでいす。ぼつちやんなんかは、いゝおつ母さんがおありで結構で御座いますかねえ……………」

電車はとまつた。丁度乗りかへなければならぬので、私はそこで降りた。

私の大きな名畫の一つに、ミレーの描いた「はぐゝみ」と題する畫がある。田舎家の裏口に、子

どもが三人腰をかけて居て、一人の尼さんが匙で何か盛つては食べさせて居る。左の子はもう食て終つて満足顔をして居る。中の子は今しも匙を出された處で、小さい口をあけて、丁度母鳥を迎へた巢の中の仔鳥の様な口つきをして居る。一番右の子は、自分の番を待ち兼ねるやうに自分も譲らずく口をあけて居る。春の日か秋の日か、かゝるで居る尼さんの背を照して、穏やかな平和が畫一面に充ちて居る。

私は其の日歸つて直ぐ此の畫をとり出して見た。あの時の話の様子から見ると、あの尼さんは三人の孤兒をそだて、居るのではあるまいか。若い尼さんと三人の孤兒。私は今でもあの尼さんの處へ此の畫を持つて行つて上げて來たい氣がする。

○お父さんの成功

十歳ばかりの男の子、お父さんに手をひかれて公園を散歩して居たが、何か前の方に面白いもので

もあつたとみえて、つか／＼と三四間さきへ獨りで進んだ。するとお父さんは笑ひながらつと身をおかして、道の傍の櫻の木の下へかくれて仕舞つた。子供は氣がついて後をふりかへつて見ると、お父さんが居ない。大事なお父さんが居ない。可愛らしい眉のあたりに次第に不安の雲が深くなつて、あちこちと見まはすけれどお父さんが居ない。櫻の木の後ろではお父さんが可笑しさをこらへてコツ／＼と樹の幹をたいて聞かせるけれどまだ分らない。子供はちよ／＼と驅け出しては探すけれど見つからない。不安の雲はそろ／＼雨になりさうな恐れがある。こんどはお父さんの方でたまたまなくなつたと見えて、持つて居たステッキの先きへ山高帽子をのせて、櫻の樹の横へぬつと出した。

これは上野の博物館の附近で見た快い一幕であるが、發見して喜ぶ子供と、發見されて喜ぶお父さんと、互に快く笑ひながら、前よりも堅く手

を握つて、暖い春の日の下を静かにゆく姿を見て、私は一種の長閑な嬉しい感じがした。そして嘗てある處で、一人の子守娘が、之れと全く同じ筋の狂言を演じて、發見させ方の適當な加減を誤つた爲に、とう／＼四歳ばかりのお嬢さんを泣き出させて仕舞つた光景を思ひ出して、その一寸した心ゆきの足りない處から起つた悲劇に對して、此の快い嬉しい喜劇を「お父さんの成功」と題して見た。

○子供ずきの博士

夏の汽車に疲れきつて、若いお父さんも眠りこんで居る。子どもは獨で窓の外など見て居たが、之れも倦きて腰かけの上へ横になつて眠つて仕舞つた。丁度隣の紳士の革靴の上へ小さい足をのせて、頭は下になつて居る。紳士は笑つて見て居たが、讀みかけの新聞を幾枚も折り重ねて、丁度子供用の枕位の高さにして、その子の頭の下へそつと

入れてやつた。子どもは愈々いゝ心持になつて眠込んだ。その小さい足をだん／＼に踏みのぼして無遠慮に紳士の顔の近くへやる。その革靴へ右肘をつけて「エンシエント グリニス」(?)を讀んで居らるゝ紳士の眼鏡へ、そのよこれたきたない足の裏が、汽車の動搖につれて、將に觸れやうとさへする。紳士はいやな顔もしないで、時々その子の寝顔を見てはほゝ笑みながら、鉛筆を持つては熱心に本へ書き入れをして居られる。

私は丁度そのま向ふに居て、ロッキーの「子供達の心」を讀みかけて居たが、この紳士が誰れといふことも知らずに無遠慮に汚い足を鼻の前につきつけて居る子供と、それを平氣で寧ろ愉快そうに讀書して居らるゝ此の紳士との對照が面白くて沼津から幾驛の間、とう／＼私にロッキーを讀ませなかつた。その紳士といふは博士號二つ有たるゝ子供ずきの方である。

最新式

「アセプト」セメルケ
搾乳術ヲ應用シタル

阪川
衛生

牛乳

山羊

の乳を

召上れ

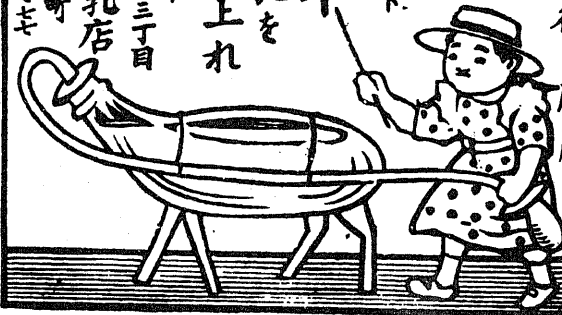
東京市

麹町区三丁目

阪川牛乳店

電話番町

六九九一七五



はに本日

如何なる白粉にも優り
て自然の美を最も自然
的に助長する
クラブ白粉と有せし





標商録登
MORIMYO
 守妙
 守田
 振

最も光榮ある
 歴史を有する
風邪血の道薬

●油斷大敵、風邪は萬病の本風邪たんせき婦人

血の道逆上腰冷寒さ暑さあたり、頭痛、めま

ひ、氣のふさぐには守妙に限る

●模偽物多し御求の節は必ず守妙即ち守田妙振

り出しと御名指を乞ふ

定價
 一帖入 金五拾錢
 二帖入 金廿五錢
 六帖入 金五拾錢
 十二帖入 金五拾錢

東京上野池之端仲町廿七番地

寶丹 寶丹 本舖 守田 治兵衛

●全國各藥店にて販賣す

東京九段中坂上
フ レー ベ ル 館

營業課目

幼稚園用恩物	幼稚園用材料	幼稚園用机腰掛	幼稚園用運動具	幼稚園用遊戲具	幼稚園用繪畫類	幼稚園用玩具類	幼稚園用書籍類	幼稚園用諸表簿類	家庭教育資料	學校用品類
--------	--------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	----------	--------	-------

御一報次定價表進呈

電話番町二九〇九
二番口座東京一九六四〇

◎新案シーソー

定價 四圓五十錢
送費 遠近によりて異なる

室内或は室外に持運びの出来る最も輕便なるシーソーにして向ひ合つて腰を掛け自然に上下す市内多くの幼稚園に試みて好評噴々全部鋼鐵製螺旋止め

◎まはり人形

定價 四十錢
送費 十二錢

一、製法、木製の盆形に十三ヶの凹所と八ヶの半環を付したる盤一ヶとセルロイド製にして斜面を轉る面白き人形一ヶよりなる

一、使用法 凹所に人形を溜らしめずして順次半環に人形を掛らしむるを目的とす

一、教育的價值

手指の練習と視覺の調節とを旨としたる練習的玩具にして併せて沈着努力の氣風を養ふ保存、興味、教育的價值の上に於て幼稚園には最も適したる玩具たるを信す

明治三十四年四月一日印刷
昭和十四年四月五日發行

編輯者 東京市小石川區竹早町三四
和田持直

印刷者

東京市本所區番町四番地

發行所 フレーベル會